

911.56  
M 25

911.56-Mo25ウ



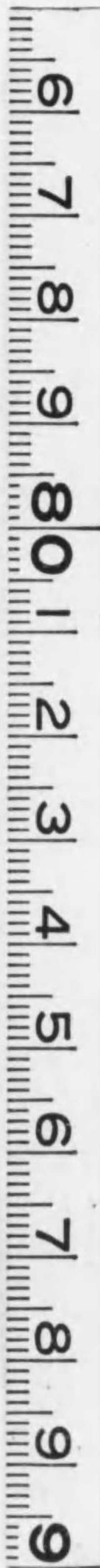
1200500756753

詩自  
集選

閱

歴

百田宗治



始



17

67



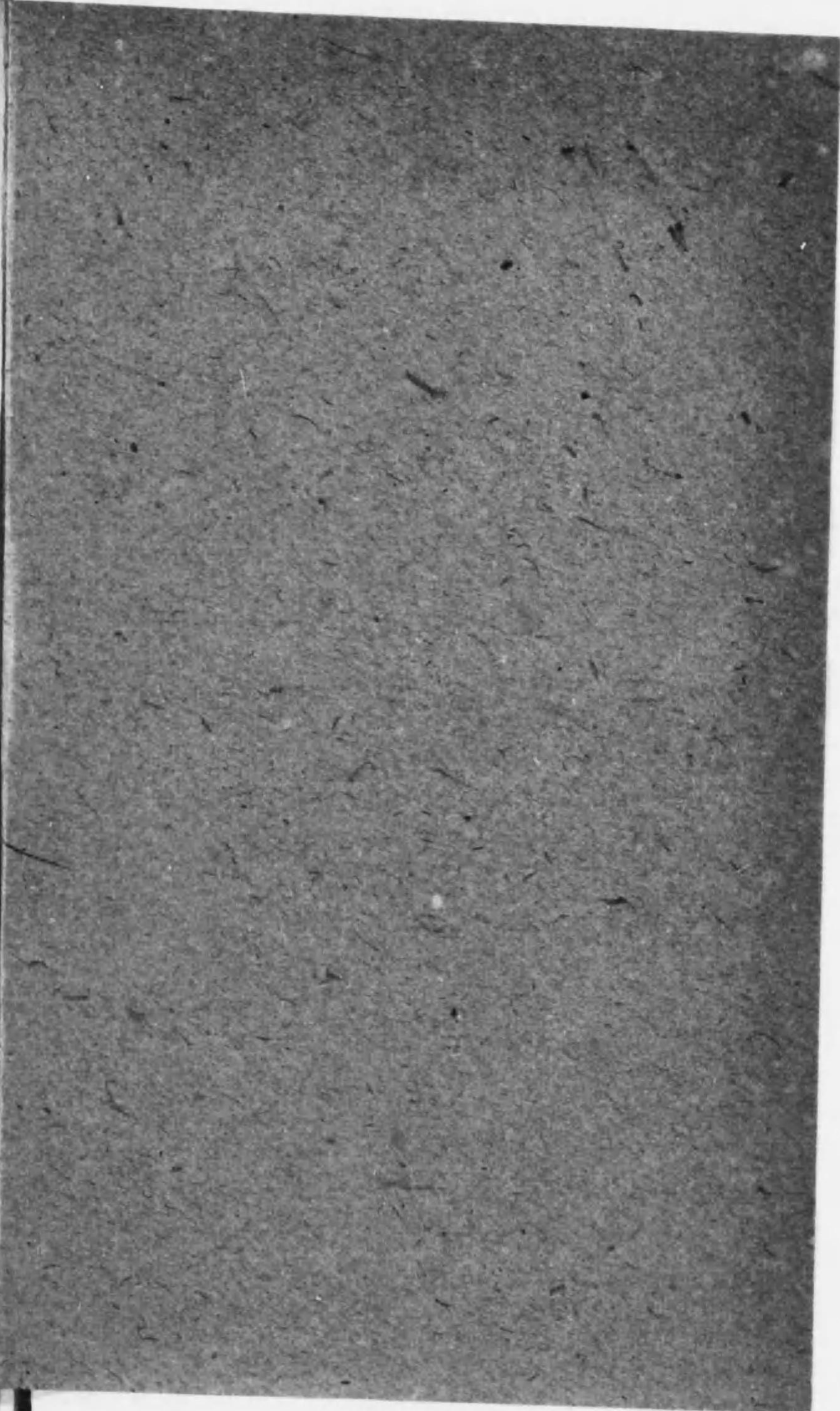
自選詩集  
閱

歷

百田宗



911.56  
Mo25



1008  
173

序詩

星々かどやきいで、  
風わたり、  
地は濕りぬ。

—— いまぞ  
殺戮をはる時……

—— 『静かなる時』

同じ著者による詩業

百田宗治詩集（『最初の一人』『一人と全體』『ぬかるみの街』の三詩集を包含。大正九年新潮社版）

新 月（初期抒情詩集にして、十八歳より二十一歳に及ぶ時期の作品を収む。大正十一年第一書房版）

百田宗治集（『現代詩人全集』第十二巻昭和五年新潮社版）

歴 史（少國民詩集昭和十七年有光社版）

蓬 萊（『偶成詩集』以後の自選詩集、『詩作法』並に覺書を附す。昭和十八年有光社版）

從軍 餘瀝（『現地版』昭和二十年）  
漢口風物詩（武漢宣傳聯盟版）

山川 草木（『漢口風物詩』内地版 昭和二十年 生活社 刊行見合）

山川 草木（『漢口風物詩』現地版を再整理し、他に散文）  
五篇を収む。昭和二十年札幌白都書房版）

目次

(最初の一人)より九章 ..... 五  
 (一人と全體)より四章 ..... 二五  
 (ぬかるみの街道)より六章 ..... 三五  
 (青い翼)より七章 ..... 五二  
 (風車)より二章 ..... 七九  
 (静かなる時)より三章 ..... 八七  
 (偶成詩集)より九章 ..... 一〇一

(何もない庭)より二章 ..... 二七  
 (冬花帳)より九章 ..... 三九  
 (ばいぶの中の家族)より八章 ..... 四二  
 後書 ..... 四九



「最初の  
人」(天正四年)より

晝

陽ひがそゞぐ。

みえざる氣温、

飛翔する蜂、蠅、とんぼ。

緑が揺れる、

——海底のごとく。

風はみえざる層をつくり……

飛翔しつゞける  
蜂、蠅、とんぼ、  
み寺の鐘かねの音。

千尋のうへ

わが腫めざめたり

八重の海原、

水蒼き底しれぬ底、

さま／＼の魚ゆきかふ。

大いなる影差すは

うへゆく船、

幾千尋の底にまで、

機關の音はひゞきたり。

千尋のうへに泛かびいで、

われは晴れたる空を見む。

千尋のうへに泛かびいで、

われはまことの人を見む。

——千尋のうへのはてしなき空を……



冥府

われらいま底ふかき冥府よりして、  
永久にかゞやく太陽の高地を。

混沌たるさ霧のなかに

姿をあらはす山嶺、

その頂の生活を。――

わが魂はその邦を、

わが瞳はその暁を、

腕はその力を、

われはそこなる光を聴く。

わがゆく路は白き霧もて掩はれ、

わがきく唄はいまはるけし。

されど内在なるものは息むときもなし。

わがあるは底ふかき冥府の籟、

すべてのもの眠りたり。

光

自分のはぼつてゆく。  
どこまでもつゞく階段、  
黄金の階段。

自分のはぼつてゆく。  
光は遠い、  
眞實の太陽の光。

自分のはぼつてゆく。  
どこまでもつゞく階段、  
黄金の階段。

—— 光は遠い。  
しかし光は溢れてゐる、  
光はそこに溢れてゐる。

幼  
兒

かれらの一人土を擡げ、  
かれらの一人彼を誘ひたり。  
ねむれる幼児を高くさげ、  
かれらの一人は空を見たり。  
かれら姿をかくしぬ。

たゞひとり彼をおきて、  
かれらかへりゆきぬ。  
土深きなか、かれら額を合せ何事か禱るなる。

見えざる鎖

人は孤獨となりえず。  
見えざる鎖われらをつなぎ、  
かたちなきものわれらをひとしく呼吸せしむ。  
たえざる流動と生育のアトモスフェル、  
われらひとしく哀しみ、  
われらひとしく歡ぶ。  
われらひとしくうたひ、

われらひとしく禱る。

われらよし哀しき旅をつゞくるとも、  
ふるさとはつねに近し。  
そが門はときじくにひらかれ、  
涙には涙をもて、  
歡びには歡びをもて、  
愛の天使闕のうへに汝をむかへむ。

夜、眠りにつくとき、

晨あしのすゞしき禱いのちりのなか、  
また力と汗に勞るゝ晝、  
汝不幸に泣きぬるゝときもなほ  
哀しきもの來りて汝を抱かむ。

### 夢みる人よ

夢みる人よ、  
おそらくはすべてみな  
眠れるならむ、  
されども路はつゞきたり。  
われらがまへの階段は、  
おぼろの霧のうちにそびえたり。

神を匿せるものは誰ぞ

わが魂の奥なる神、  
神を匿せるものは誰ぞ、  
日夜かく叫びて神を求むる。  
わが魂の奥なる神、  
あゝ神を掩へるものは誰ぞ。

『草の葉』より

ウォールト・ホキットマン

私は私自身をうたふ

私は私自身をうたふ、単純で、そしてセパレエされた一人を、  
しかしながら私はえらぶ、デモクラテックな言葉を、マッ  
スの言葉を。

私はうたふ、全身の有機機能を、

たゞにその顔かたちにとゞまらず

またミューズの貴重な大脳をのみではない。

私は肯定する、完全なる肉體こそ最も價高いものである  
ことを、

男性とひとしく私は女性のものをうたふ。

大いなる生命よ、その情熱、その充てる脈搏、その精力、  
幸福な生命、それは神の法則の主權のもとに最も自由な  
行爲として形づくられる。

近代人！<sup>ロシム・モデルヌ</sup> 私のうたふところのものをそこに見よ。

私がうたふのは汝のためである

私がうたふところのものは汝のためである、

汝のために私は過去の上に現在をつくりあげた。

(樹木がその根から永久に生ずるやうに、

現在は過去の上に築かれる)

私は時と空間を釋放した、そして私は彼に不死の法則を  
與へた、

彼自身の固有の法則に光輝あらしめるために。

最初の朝のアダムのやうに

24

最初の朝のアダムのやうに、  
私はみどり葉の搖籠を捨てる、眠りから甦つて。  
私をながめよ、私の過ぎる時、私の聲を聴け、  
私に近づけよ、  
私に觸れよ、私の過ぎる時に私の身體にその掌を觸れよ。  
私の身體を怖れるな。

『二人と全體』(大正五年)より



## 媒介者なしに

媒介者なしに

個々と個々を以て進まう。

時としては「言葉」をさへも、

僕らが存在するのは個々に於てである。

僕らが生長するのもまた……

植物のオルガニズム、  
動物のオルガニズム、

——そして僕らの肉體のうちの同じもの。

靈魂は眠りの時を持たない。

君のものを示せ、

僕らのものを示さう。

示すことのできないものゝためには僕らがそれを見出し  
にゆく。

僕らは鍵を持たない、

——呪文をも。

僕たちは力を持つてゆく、

誠實シンゼリテを持つてゆく、

僕らは眠れるものをめざませる。

死んでゐるものをもまた……

僕らは個々である、

ウマニテこそは總和だ。

僕らはそこへ到着しに行く、

僕らはそこへ旅立つた。

僕らが求むるものはオアシスにあらず、

またかのみどりの樹かげではない。

「時」

騒音の不秩序と混雑のなかにあつて失はれず、

つねに僕らの耳にするところのもの、外そとに續いてゐる音。

その音のなかに僕らをめざませる短い「時」、

——あゝ、その時がすでに過ぎ去る。

高天をめがけて

宏大なる宇宙――

そこには一切の星座が動くことなしに居る。

太陽は燦きらいて一切のものを領有する。

おゝ、そのなかにたゞ一つ、

廻轉し、狂ひおめき、

燃えさかる火のくるまのごとく、

またみづからの痛み能耐へかぬる魚うまのごとく、

すゝみかね、たじろぎ、しかもなほ一刻もとゞまること  
なく、

いづくにか到着し、いづくにか己おのが國を見出でんとして、

宇宙をさまよふ一個の星、

星座をもたぬ一つの星、

一切の懷疑、一切の自苦、一切の生長の意志の

寸時もとゞまりがたい力、

高天をめがけてのぼりゆくもの。

僕らのもので

僕らのもので

世界はやがて充たされるだらう。

友よ、

僕らは共に生きる。

共に呼吸する。

僕らの聲は力足りないが、

しかし永久に失はれはしない。

僕らの歩みはのろいが、

しかし停止される時を知らぬ。

僕は君たちを抱く、

君たちを呼吸する、

そして僕らはさらに眠れる一人の友を揺り起しにゆかね

ばならない。

埋もれつゝある一人の友を、

傷きつゝある一人の友を、

悩める一人の友を、

おゝ 僕らのものが

草の根のやうに地面の底深くその手を繋ぎ合はすだらう。  
僕らのもので  
世界はやがて充たされるだらう。

「ぬかるみの街道」(大正七年)より



地 平

地平のはて、  
そこにそゝり立つてゐる數本の樹、  
その梢と梢の空隙に朱橙色の空の輝きが見える。  
明日も晴天であらう。

一 本 の 樹

私は一本の樹を見てゐる、  
その眞裸かな枝ぶりを見てゐる、  
そのふしくれだつた幹を見てゐる、  
その年老つた皮膚の色を見てゐる、  
その根を見てゐる、  
その姿態を見てゐる。

その實在は私に怖い。

日まはり

もがけるだけがきあがり、  
一寸でも高く太陽の本體に近づかうとして、  
全身の努力で咲き切つてゐる力、  
大きい黒味がちの蕊、  
そこには花粉をいつばいに抱きかゝへて  
一つの祕密も持たない胸を日光のまへに曝し、  
充ちわたつた精力で空を仰いでゐる。

力のありつたけでもがいてゐる。  
ありつたけで燃えてゐる。  
翼を張り、  
全身の機能を露出し、  
一點の陰影もない。  
何といふ力づよい表現！  
何といふすばらしい實現！  
燃えくるめき、

地上の一切のものゝうへに燃えひろがつてゐる日まはり、  
いま私たちを壓倒してたちのぼる幻影、  
宇宙大の日まはり、  
その裸の美しさ――。

### 聲

遠いところで子供たちが唄ひ合つてゐる。  
ひろい道路を越えた野原の向ふで、  
その聲はほそい金屬の尖端か何かと觸れ合つてゐるやう  
だ。

――ひとかたまりになつて騒いでゐる聲。  
追つたり追はれたり、



組んだりほぐれたりしながら、  
遠くの青草のうへでふざけ合つてゐる聲。

晴れわたつた空に木魂こだまして、

子供たちの聲がきこえて来る。

遠い世界からのやうにひゞいて来る。

はるかに支持し合ひ、保ち合ふ人間の聲がきこえて来る。

### もしもかの星に

もしもかの星に、

夜の蒼穹そらの遠い星のなかに

取残された一人の人間があるならば、

そしてもし彼がそこから吾々のこの世界を見るならば、

吾々のこの明かるい愉たのしみしげな地上の世界を見るならば、

おゝ、おそらく彼は孤獨に狂ふであらう。

聲張り上げて叫ぶであらう。

絶望の叫喚を投げるであらう。

そこから飛び下りたく思ふであらう。

が彼はなほそこにとゞまらねばならぬ。

苦痛の谿に沈まねばならぬ。

そして日夜彼はたゞひとりこの繫がりなき距りを見ねばならぬ。

そこになほ生きねばならぬ。

あゝ、もしも吾々の一人がかゝるおそろしい絶望のうち  
に生きるならば、

おゝ、そして彼がなほ生きるならば……。

## 蛾

わたしは一匹の蛾である。

春、わたしは翅と数多い脚を持つて生まれ出た。

わたしは火を戀ひながら、

農家のらんぶの周囲を翔んでゐる。

開放した窓からはいる夜風のなかを

かの燃えてゐる本體に近づかうとし、

かの莊麗極まりない炎のなかに捲き込まれたいと希ひ、

その愉<sup>たの</sup>しさと危険に酔ひながら……

46

梨の花の生暖い夜の呼吸が

わたしの胸を釘づけにする。

その匂ひが渴いたわたしの魂をそゝりたてる。

わたしの翅は硬直し、

わたしの咽喉はおそろしい飢渴にふるへる。

わたしはその煤けた大きいらんぶに近づき、

そのよごれた白い笠に身を叩きつけ、

錆びたそのほそい針がねに胸を擦りつける。

またわたしは昏い天井の影の方に舞ひ上り、  
穴だらけの障子紙に戸惑つた頭突きを持つてゆく。  
そしてまた一人の年老つた百姓の大きい動かぬ影法師の  
なかに身を投げる。

わたしは人間の手を知つてゐる。

その大きいざら／＼じた掌<sup>てのひら</sup>を知つてゐる。

それが無造作にわたしを叩きつけ、わたしを殺すことを  
知つてゐる。

いまその膝のうへに丹念に重ねられてゐる枯木のやうな

47

手、

晝間の勞働につかれて

死んだやうに動かない萎びた手、

しかしそれは怖ろしい、

その手がうごけば怖ろしい、

それはたゞひと搏ちでこのわたしを殺すのだ。

—— 神さま、

わたしをこの世に送り出して下さった神さま、

もしあなたがわたしを愛してゐて下さるなら、

どうぞあの手が動かぬやうにみまもつてゐて下さい。

ほんのしばらくの間、

わたしがあの炎への入口を捜す間、

わたしが愉しくそのなかに捲き込まれてゆく間、

わたしが身も世もなく

あの火のなかでじり／＼と焼かれてゆく間、

わたしがそのなかに吾を忘れて愉しく自分を滅ぼしてゆ

く間、

そのあとではあの手が部屋ちゆうを掻き廻してもよいのです。

世界ちゆうを荒れ狂つてもよいのです。  
わたしの死骸を地面に叩きつけてもよいのです。  
わたしをこの世に生み出して下さった神さま、  
あなたがもしわたしを愛してゐて下さるなら……

『青い翼』(大正十一年)より

青い翼

空いつばいの青い翼、  
そこからうち振られる風が  
吾々の野に落ちてくる。

白雲が飛ぶ、

無数の襞とそこに洩れる日光。

光がある部分にそゝがれる。

流れは

貝殻のやうに照り返し、

蝶はそがひの羽を打たれて、

巧みにその姿を空中に消す。

ひとかたまりの灌木、

丘陵、森かげの

赤煉瓦の製絲工場。

—— 遠い地平に

いま日が翳る。

慰安

夕暮はしづかな樹間このまにたゞよふ。

仄かな白いひかり、

梢から梢に

音もなくすべり落ちる風。

空の一方は明かるい、

透明な絹ばりの空気の奥に、  
上げられた休戦旗のやうに  
いま星が光る。

部屋

私はをちついた適度の濕り氣を持つた部屋を愛する。

調和し、整頓した埃氣ほこりけの立たぬ部屋を愛する。

夜はその黒い外套が、襖やまはりの壁々に寛かな影落す  
部屋を愛する。

美しい敷物とわざとしからぬ家具を愛する。

外からはいつて來た時に、その懐しい沈黙の奉仕者たち  
が迎へてくれる聲ない慰いんぎんに私は親しむ。

をちついた靜かな部屋、

そこには一切の過去が變貌し、

おだやかにいつも自分のノオトを引出し得る見えざる従  
者がゐる。



樹木

情を籠めた嵐に

樹木は素直にその枝をまかす。

あらしは雨を追っかける。

そして樹は、その後あとに暖い六月の陽の差してくるのを知つてゐる。

幼年時代

I 夜

空の奥深く、小さい星が瞬いてゐる。下界は暗憺として家々の棟が低く、どこかの四辻で子供たちが寂しいおんごくの歌を唄つてゐる。

どの家にも暗い行燈の灯が點いてゐる。大人たちがひそ

ひそと囁き合ひながら何か不安な出来事を取りまいてゐる。みな途方に暮れて、このうへは神か佛の加護による外はないとでも言ひ合つてゐるやうに見える。

人間以上の力が驚づかみに渡つて行かうとして、この町の上にかゞひよつてゐるのではないかと思はれる。不穩で、重苦しくて、しかも人々は何も知らずに向き合つてゐる。

子供たちだけが唄つてゐる。てんでに赤い細紐の端を支

へ合つて、くぐらい堀割の方へ、堀割の方へと小さい輪を忍がいて行く。

## II 母

裏の堀割から上つて来る午後の水面の照返しの中かで、戸棚のうしろで、彼女はいつもその仕事をつゞけてゐる。小さい丸髷、僮僕のやうにくゞんだ背骨、しかしその深々と垂れ下つた額には永い時間の心勞と艱苦の數多い小皺が刻み込まれてゐる。

時たまに蒼ぞらの覗きかけるこの堀割と煤煙の大きい都會の片隅に、彼女はまるで一つの偶像のやうに、その小さい丸髻と無知のうへに積み重ねられた人情的な雰圍氣でその坐り場所を固守してゐるやうに見える。小さい反抗と争ひとの、しかし運命への最後の従順をその物言はぬ前額のうちに藏ひながら。

日當りのいゝ路上。喧噪と紛糾の群集の歩調を掻きみだす廣目屋の音楽隊。——しかし家の中はいつも暗い。水面からの微光が夕暮のやうに匍ひ寄つて來る午後

戸棚のかけで、彼女はその仕事をつゞける。モノトーンで、空氣は昔のまゝである。

### III 川 端

木造の壊れかかった橋であつた。空はいつも曇つて、時その間から蒼空が覗きかけた。両側には同じやうな作りの材木問屋がつゞき、よごれた白壁の土藏や、高い——風車のやうな洗濯工場の物乾し臺が空をつんざいて、そのうへにいつも白い長い布ぎれが風に靡いてゐた。

菱形に組み上げられた材木が濃い影を水のうへに落して  
ゐる。さうして積み上げられた水びたしの材木のかげ  
に、いつもたくさんの小魚や海老のひそんでゐるのを  
少年たちは知つてゐる。そこにはまた流れ寄つた藻や  
塵芥が巧みに小魚たちの匿れ場所をつくつてゐた。

それは毎日小學生たちがかなしげに鞆を吊し、草履ぶく  
ろを提げて往來した寂しい川端であつた。よこれた白  
壁の土藏、そのうへの高い——風車のやうな物乾し臺、

そこにはいつも白い長い布ぎれが風に靡いて散つてゐ  
た。

午後の歌

をちついた、静穩な午後の時よ。太陽はその赫躍たる圓光のなかに跣坐する蜘蛛のやうに翼を收め、充ちたりた成就の満足にうつとりと晝の恍惚を味ひ愉しんでゐる。

海は油のやうに滑らかで、化粧の濟んだあとの鏡のやうに自足してゐる。をさな兒のたのしげな謔言が、あま

い母親の乳の味を語つてゐる。粘着性を持った數しれの肉體が、折重なり、腕くみかはして、無限の倦怠から微動し合つてゐる。

船は城廓のやうに浮いてゐる。衛兵や物見臺の兜や白壁がきら／＼と貝殻のやうに光る。青い船體は遙かに佛國飛行將校の帽子のやうに眩きの波の上に載つてゐる。煙は貴婦人の羽帽子のやうである。

波止場には幾人かの見送人が残り、ランチは役目を終へ

て満腹の上衣のうへに揺れてゐる。西洋料理店の出張所には誰もゐない。軽い風が卓のうへの折り疊んだナフキンに戯れかゝり、それからまた傍らの税關の建物の屋根の小旗の方にその歩みを移して行く。

二つつゞいた汽笛が、夢の脅威からさめた犬のやうに、たかく、しかし長い低音をひいて鳴りひゞく。物倦さと單調とから苛立つた、それはヒポコンデリーの叫びである。常習の、もはやどこにも反響を残さない無駄な警笛である。

ほがらかで、透明で、しかし大氣は少しの疲労を覚えてゐる。午後は肉體の時である。曇つた靈魂の瞳は、あたりの無反響な輝きのなかにその最初の樂園の記憶を夢みてゐる。宏大な空に眞裸のエヅが浮いてゐる。その白い肉體は背向ひに日の光を照り返し、彼女の抜き捨てた白い衣裳のきれはしが軽く空氣のなかに泛かんでゐる。

いまは降下の時である。あたらしい託宣の午後である。

蛇はその洞窟を出で、鷺は中空高く漂渺として輪を描いてゐる。<sup>ツアラトウストラ</sup>超人はその愛する動物とともに山頂の霧をわけて降る！

### ヴン・ゴホの肖像

赫躍と燃えくるめく太陽の健康性のなかに、  
ヴン・ゴホの肖像が白熱する。  
つぶらな鋭い眸はその二つの中心、  
かたく一點に集注されて  
世界の實體を凝視する。  
口はとざされた沈黙の表象、  
うちにたゞへられた發想を壓へる

生のうづ巻く惑亂、

額は重くその眸を掩ふて

人間の表現エキスプレッションの前に永久の陰影を落す。

をち窪んだ兩頬は生の苦節

その烙きつけられた刻印のあと、

おゝ、いま白日のもとの

このさびしき憂鬱のすがたよ。

私はそこに、日のもとに

光りかゞやく日まはりの幻影を見る。

もえあがく數しれぬ花瓣の炎を、

そのファンタジイを。

星の夜のサイプレスを。

大空にむかつてのその黒い狼煙のろしを、

プロヴァンスの夜の田舎みちを歸つて行く二人の男を、

話しながらゆくその夜の快活さと美しい空気を。

また街路のかたはらに立ちつゞく生きものゝやうな大樹

の幹を、

ふしくれだつたその隆起を。

白い襟巻をつけた二人の婦人を。



襯衣の胸はだけた緒ら顔の農夫を、  
はみだした朱髪ブロンドの毛から滑り落ちさうな帽子を、  
たちつゞく麥畠のはての入目を、  
その赤い一點の炎團を、  
畠のなかにつゞく一筋の田舎道を、  
その中ほどを急ぐ小さい歪形いびつがたの一つの木馬車を、  
曇りの日の空の雲の變化を、  
その下の一望涯のないひろい田野を、  
遠方に小さくなる無数の畠の畝を、  
また陸橋を。

腕くみ交した二人の労働者を、  
病院の庭を、噴水を、  
二階の窓から見おろす蒼ざめた婁者の姿を、  
浮世繪の前のペールタンギーを、  
組み合せたその膝のうへの大きい百姓のやうな掌を、  
静物を、卓の上のカップエ器を、  
幾つかの林檎を、  
そのするどく強い實在の光を、  
遂に最高の（一切のものをつらぬいてなほ最高の）實現  
にむかふ意志を、



遂に完成をしらない表現への不斷の欲求を、  
定型を持たぬエレメントの凝集を、  
力のぶつかり合ひを、  
あらゆるあまりに正確なる線を、  
不斷に充ちたならばぬ表情を、  
遂に他の何者でもない色彩それ自身のマッスを。

おゝ 遂に自然を招き寄せんとするための自らの死にま  
での求めを、  
すべてのものゝ終りでなくそのはじめであるところの死

を、  
あらゆる幻滅のうへの實現の意志を、  
炎を、燃える世界の本體を……

彼こそは燃えあがりゆく炎のなかの一本の薪である。  
それ自身で燃える一本の薪である。  
燃えつくしてなほ世界を席卷してゆく永遠の火の手であ  
る。

地上の、はるかな太陽への相呼應である。  
それに合せんとするものである。

おゝ、しかして彼自身のための一つの肉體、

憂鬱と囚はれのかなしい實在。

わたしは死のまへの彼のさびしい微笑を見る。

上げられゆく魂の表情を見る、

いな、遂に恢復されたる意志を……

(白日のもとこのさびしき微笑よ、

世界のこの完成なる破綻よ。)

『風車』(大正十一年)より

出 發

太陽は岬のむかふからのぼる。

太陽は一直線に私の旅宿の窓がらすを射る。

太陽は岬と岬の間の

藁屋根や瓦屋根の重疊し

輻輳した部落のうへに金色に輝く。

太陽はふり撒く、

朝の挨拶を、

遠い海のむかふからの贈りものを、

汐かせと怒濤の

あの宏大な錬金の産物を。

私は立つてゐる。

朗らかな朝である。

私は仕立てられた馬車のはげしい金属性の身ぶるひを聞  
く。

いたづらに吹き鳴らす喇叭の音を聞く。

軒下の馭者たちの快活な立ちばなしを聞く。

私は小さなこの海ぞひの町の  
めざめてゆくいろ／＼の物音を聞く。

私は風の音を聞く。

この暖國の朝明けのきびしい風の音楽を耳にする。

霜ばしらの立つた凍りついた街道のうへに、

私はむれつどふたくさんの子供たちを見る。

萬祝ひを重ねた漁夫たちの

日々から出る白い息を見る。

晴れてゆく空にちらばる

壯快な鱗雲を見る。

私はいま出發する、

私は行く、渺々たる太平洋の岸に添つて、

私は聴く、仕立てられた馬車のはげしい金属性の身ふる

ひの音を。

## 太平洋の岸で

馬車は岩ばなをまがる。

馬車はこはれかゝつた燐寸函で、

馬車は手毬のやうに弾む。

大玻璃の

海景は折れまがり、

しづかな波、

ちらばふハンカチのやうな舟々、

外洋の壯大な眺望はいま失はれて、

ぼつかりとした日だまりの海だけがそこにある。

二つの手を遠く無限と蒼茫の太平洋にむかつてさし出し  
ながら、

平和で明かるい村々は愉しい午睡の時間を送る。

きらめく貝殻と小石を敷きつめたせまい往還、

家々の戸口に磯の香をみたす乾燥した漁具、

太陽はいま私たちのまうへにある。

馬車は日かげの岸ばなを行く。  
馬車はこはれかゝつた燐寸函で  
馬車は手毬のやうに軽く弾む。

『静かなる時』(大正十四年)より

陸橋

道は漏斗じやうのやうに、  
大きい彎曲かゝをつくつて陸橋の方に吸はれて行く。

眼の下の

赤土の腹にじみ出た急傾斜の斷崖、

その下には葭や蘆が茂つて、

ところ／＼に蒼空を映した水たまりが片目のやうに光つ

てゐる。

地の窪みの底の

木づくりの鐵道官舎、板圍ひの小屋、

くざられた花園の

赤や白の草花。

桔槔はねはきしみながら、

ほそ／＼と立つ夕餉ゆふげの煙のなかに

その槓杆の片手をたかく聳えさせる。



夕暮のおだやかな大氣の沈澱、  
靄とたちのぼる雰圍氣の燻された青い田野の方へ、  
遠く地平にうづくまる幾本かの灰白色の煙突、  
介在する工場の屋根々々の方にむかつて、  
陸橋はその臙ろげな又木をなげかける……

倨傲な汽笛と

たちのぼる煤煙の惑亂のうへに、

いま入日が

淡く塵埃のやうにかゝる……

### 照空燈の光の下の田舎

人々はうちむれて戸口にあらはれる。

さびしい往還は時ならぬとよめきにみたされる。

天空をつらぬいて、

かの神祕と暗黒の夜ぞらの一方から

都會の方から

さしひらめき、またかき消されるふしぎな光茫と明滅の

信號……

雲間をつらぬく白熱の矢のやうに  
それは廣袤たる尾を引いて遠くこの田舎の空に反映して  
来る。

歡樂と熱狂の都會の横顔が  
ひらめく投槍のやうに人々の映象のうへに落ちる。  
手にとることのできぬ遠い光彩のあとを追つて、  
人々はうちどよめき、また叫喚の聲を擧げる。

漆黒の雲間に描き出される

眞晝に見るやうな空の變化、  
無限の空間への模索と照明の手。  
しかしその光はやがて遠い地平の一角に失はれて、  
そこには寂寞と沈黙が残るばかり、  
樹々の影繪と、  
ゴルゴーンの深い眠りにも似た巨大な山々の姿が横たは  
るばかりである。

十二月

——林業試験場にて

チューリップ<sup>ツリイ</sup>樹の疎らに立ちならんでゐる林の奥まで来て、私はその落葉のうへに坐つた。

ひろい林業試験場の、しかし茲はもうずつと奥である。私が茲まで来る間に、クリスマス<sup>ツリイ</sup>樹で見覚えのある葉の硬い獨逸唐檜や、印度産の杉や、大部分その葉を落しつくしたあの巨大な北米産のはんてん<sup>ハント</sup>ばくなどの立ち續い

た、緒土の、多少の濕り氣を持つた靜かな道がつづいてゐた。小さい檜の苗床もあつた。影くらい杉の林に編目をしたうつくしい午後の陽がさし入つて、夏の夕方などどんなに居心地がよからうと思はれる氣もちのいゝ傾斜<sup>イナカ</sup>地もあつた。そのなだらかな芝生の傾斜面の高まるところに、さし交す枝々と、その間から洩れる青空を映して、細かいせゝらぎの音を立てる澤のやうな小流れもあつた。そこには同じ代赭いろの濕つた土に掩はれた名ばかりの丸木橋もかゝつてゐて、その朽ちた橋杭には落葉がいつぱい、殆ど水の流れもおほひつくすかと思はれるほどに

うづ高く溜つてゐた。遠くで研究生であらう學生らしい青年が二三人、樹木の間を透して何か人夫を指揮しながら立働いてゐる姿が小さく見えた。

何といふ美しい空だらう！だがもうそこには冬が來てゐるのだ。あらゆる季節の動搖を退け、淨化し、昇天せしめる、悲壯で信仰的な闘ひがもうはじまつてゐるのだ。雲々は追ひのけられ、一切の不純物は一掃され、そして凱歌を擧げてかれらの聖軍が過ぎて行つたあとに、太陽は十分満足してその四肢をひろげてゐるのだ。仰向けになつたまゝ、丁度眼の届くかぎり傍らにその一本の

チューリップ樹の幹のはるかに中空を衝くその細い尖端に見入つてゐると、その高いほがらかな天空での樹と空気との會話が、電導體となつたその幹を傳はつて、針のやうにこまかく震へて私の耳に入つて來るやうに思はれる。深い青い空のなかに溶け込んで、遠くに見失はれる信號旗のやうに、その尖端の一枚の乾反り葉の風にふるへてゐるのが、小さく、はるかに小さく眼にはいる。

日は高い中空にある。しかしその小さい眩惑の本體は私の眼を反れてゐる。いまは交錯した茨の茂みのなかに投げ込まれた一びきの小蟲のやうに、私の周圍から無限

の蒼穹の方へ手を伸ばして立つ何本かのチューリップ樹の枝々が、せいと、五十センチあるかなしの丈低い灌木の茂みとより見えぬ。こゝには風もなく、ひとしきり私の身體につきまといつてゐた一びきの蠅も、その最後の眩きを耳のへんに残して飛び去つたきり、ふたゝびその姿を見せぬ。

地面といふ地面は落葉に掩はれて、少しの身ゆるぎにもザクザクといふ音を立てる。そのなかに藏ひこまれた陽の暖かみを透して、しかしさすがに地の濕りらしい、しつとりと幾枚かの着衣を通す底冷たさがある。

だしぬけに一びきの蟲が私の耳もとに飛び出した。見ると殆ど落葉の色と見紛ふばかりの焦茶色の小さい蟋蟀こせむらである。こゝろない私の横臥にしづかな午後の夢を破られたのであらうか。だがいづれにしろこの蟲の命も短い。ふりむきもしないで、小さいこの零落の樂手は、その持ちまへの身がらさと敏捷さで、たちまちのうちにその姿をかきなる落葉の間に匿してしまつた。ふと氣がつくと、この静かで平和な一劃のところへ、絶え入るやうなかすかな絲の音を立ててゐる何びきかの同じ蟲の聲があつた。あつちにもこつちにも。かれらは何事もしらない。

たゞうたふことだけを、いや、それすら無心なこの昆虫  
たち自身の生命には何のか、はりもないことであらう。  
充ちあふれてゐる太陽、うごきのない気温、晴れわた  
つた真晝のこの十二月の樹々の間で、落葉のなかで、私  
の聴くのはたゞその遠い音楽だ。うすれてゆく季節のほ  
の暖かみのなかに、消えてはおこるそのありとしまない  
糸のひゞきだ。

鳥かけ

いつとはなしに照つてゐる陽、  
いつとはなしに過ぎてゆく鳥かけ。

早春

うつり來しわが部屋、  
窓ごしに遠き丘見え、  
丘のへにまだ春さむき櫻樹のならびたる。  
日ごとその下の人家に煙あがりて、  
ゆふべしらんと霧のこむる。

## 爐邊

友よ、君はいつもその爐ばたで銃をみがいてゐる。  
くもり硝子の障子の中から  
火の粉のやうに遠い林の上に落ちる小鳥たちをうかゞひ  
ながら……

## 日光浴

或は 幸福な家庭

八つくらゐのブロンドの女の子が鞦韆おらんごに乗つてゐる。  
それを取巻いてゐるのがパイプを啣へた公使の御主人、  
その奥さん、  
柿の種子たけなのやうに萎えたお祖母さん、  
それから道化のやうに頬べたを赤く染めた娘さん。  
生籬越しに見る高麗芝の古い庭には  
日のひかりが十年もこのまゝで動かないやうに見える。



翅

その姿は失はれた。

その翅はわが庭の物荒れた風物をひとしきり耀かせ、

ひとゝき色どつたのち、

風のやうにからくとび去つた。

だが その光耀<sup>ひかり</sup>はわが眼にある。

その色どりはわが夢に残る。

—— あゝ、その色どりはわが夢に残る。

北かぜ

北かぜはそのこゝろを知つてゐる。

北かぜはあらゆる季節のあとからやつてくる。

北かぜはその奥にうつくしい「春」をかくしてゐる。

遺れもの

板塀越しに掌ほどの陽のひかりが落ちる。  
太陽だつて気がつかないにちがひない  
この遺れものを私は珍重してゐる。

迎春

床に千兩を生け、  
あたらしいネビ・キャットを一籠購つた。

## 怠惰と來世

——お前にとつてお前自身の笑ふべき點は何であるか。然り單にお前が智慧を實用しないで、智慧を理解しようとしてゐること、お前がいつも無の用意をしてゐること、生きることなしに生活してゐること……

アミエル

1

たのしきかな われ少年のごとく戀し、

たのしきかな われ少年のごとく遠くに思ひを馳す。

2

來世を信するものは、

(或は來世を信せざるものは)

來世をたのしく生きんと欲せば、

(或は來世をこの世に觀んことを欲せば)

人よ その欲するところを生きよ。

何が欲しいのだ。

欲しいものが手にはいると思ふか、

この世がおまへの欲するまゝに形を變へてくれると思ふか、

おまへから流れの方に行け。

流れは決しておまへの方には來ないのだ。

雲を愛するごとく人を愛せよ。

雲を信するごとくわが世を信せよ。

とらへるものはわが手である、

とらへられるものは「彼」ではない。

私の欲するのは彼岸なのです。  
私の知らぬわが生いのひらかれるときなのです。  
この門が閉ぢて、  
あの門のひらかれる時なのです。  
その時私は王座にゐませう。

何もこの世ですることがないといふのは  
なんといふ單調なことであらう。  
人よ、私に鋏をあたへよ。  
人よ、私に算盤をあたへよ。  
人よ、私にペンをあたへよ。  
が、人よ、何よりも私に向つてその拳銃を發射せよ。

知らない自らが欲しいのです、  
しられない「吾」が見たいのです。

「何もない庭」(昭和二年)より

囑目 1

かすかな薄日を落したゞけで  
日のひかりは消えてゆくではないか。  
その片鱗をかゞやかせたゞけで  
蝶はわが眼から失はれて行つたではないか。

囑目 2

囑目の世界を愛しよう。  
なるべく多くの「吾」を見出ださう。  
——あとに遺すものは形骸。

狭い戸口

私のみつめるのは  
たゞその狭い戸口<sup>とぐち</sup>だけだ。

梟

梟<sup>とくろう</sup>だ。

冬だ。

ながい  
ながい冬だ。



叔父ワーニヤを読んだ晩

さうだ、仕事でなければならぬか。  
なんでもよい、計算する、筆記する、報告する、  
さういふ仕事でなければならぬか。  
叔父ワーニヤが言つたやうに、  
なんでもよい、仕事、仕事、仕事。

母の夢

母の夢を見る、  
老いたる母の夢を見る、  
あたらしい悔ひといつくしみが  
とどかぬ手でわが胸を搏つ  
いまは遠い故郷なる母の夢を見る。

何もない庭

日がかげれば

何もない庭はさびしい。

日さへ照つてゐれば、

萬朶の花の咲きにはふ心地がする。

味噌汁

朝は味噌汁をすゝるんだとよ、

くらいうちの門<sup>ど</sup>さきをすぎる豆腐屋をよびとめて、

朝はどの家でも味噌汁をすゝるんだとよ。

—— どの家でも、

鍛冶屋のやうに火を閃かして、

くらがりのなかで味噌汁をすゝるんだとよ。

## 草ぜみ

うしろの柱で、  
だしぬけに草ぜみが鳴き出した。  
いつの間に攀ちのぼつてゐたのか  
乾草ほくそいろのさびしい蟲である。

## 人生

寐床ねとこがあり、  
明日あした食たべるだけの麵麩めんぷがあり、  
臺所にそくばくの炭があれば、  
——家のうへに屋根あり、  
屋根のうへに月あるをおもふのみにて  
わが心足る。  
われはかゝる平靜なる人生を愛す。

骨董店

この閑暇らしい店さきには、  
蕪村が買物にでもやつて来るか。

『冬花帖』(昭和三年)より

蝶

一びきの蝶がとんで来たので  
その道が風景らしくなつた。  
あたりらしくきりひらかれた赤土の道路だが  
松の姿も自づおのになつた。

碓氷峠

この列車には氷塊の匂ひがする、  
きり出したばかりの粗あら々しい氷塊の匂ひがする。

★

曉ちかい風が吹いて、  
空にはよぢれた繩のやうな星座がかゝつてゐる。

夕雲

お伽ばなしの棄てられた王女のやうに  
この井戸ばたに花さかせ！  
黄金の馬車があのだ夕雲から下り立つ日を夢みながら……

返り花

冬日ふゆひのなかの返り花のやうに、  
妻よ おまへはみごもつたのだ。

★  
こゝろかたくなな童女にも  
神さまはその手をお置きになつたのだ。  
こずゑに返り花をつけるやうに、  
神さまはそこにも微笑を残してお行きなされたのだ。

木の枝

木の枝は矯めねばならない、  
縁側から眺めてまた鉄を入れに行く。

呪文

詩を書くとき

言葉はすべて呪文となり、

どんなつまらぬ一語一語も

みな翼生えてかの遠き空に召されゆくごとし。

竈

ゆふぐれの物荒れた家のおくで、  
竈の火がぱち／＼と燃えてゐる。  
この世を太古に返し、  
この世を神のおつかひものにする  
壯嚴無比の赤い火が燃えてゐる。

夕日

みちばたの板の太木に夕日が片照りしてゐる。  
あの高い梢のうへでまつかに燃えてゐるものは  
あれは私たちの遠い祖先の見たのと同じものだ。



庭の飾り

私の家の庭にはいつもほしものがつるされてゐる。  
子どもの胸あてや、枕覆ひが乾されてゐる。  
敷布やゆかたが垂れ下がつてゐる。  
重げに陽の中に吊るされてゐる。

『ばいぶの中の家族』(昭和六年)より

## 眠り

女神の裳裾である。ぼくの胸を搏つ一本の薪である。死である。少年時代のつらい追憶である……

## 夢

間断なしに矢が下りて来る。穹窿型の遙かな遠い空にあらはれ、唸りを生じ、羽風をそろへ、そして一定の間隔をおいて下り重なつて来る。急速度に。そして鈍く。畳まれる扇のやうに。「時」のやうに。強い鞭がやはらかく子供の皮膚の上に落ちるやうに。雷のやうに。あられのやうに。雪のやうに……

立琴を弾く人

立琴を弾く人は天使のやうに弾く。

立琴を弾く人の手は天使の手のやうに動く。

劇場には天使が充ちてゐる。

天井にも天使がゐる。

棧敷にも天使がならんでゐる。

——いま少女の夢見るやうな

やさしい天使の影が高い空間をよぎつて過ぎる。

眞晝

立派な王様だが、

お前はひとりで寂しい。

金色の襪はを数かざりなくぶら下げて

お前は日の中を往つたり來たりする。

笛と雲

子供が笛を吹く。

おもちゃの笛を吹く。

子供が雲を呼ぶ。

——雲が子供のそばに下りて来る。

ばいぶの中の家族

くらい夜の荒蕪地をよぎつて行く。

ぼくの口にはばいぶがある。

ばいぶのなかに家族がある。

風俗

プラットフォームにはいろいろの人がゐた、

王朝時代の給仕人のやうに、揉み上げを五寸も伸ばした

皇室の巡警と、

マントをしようつた斷髮娘とが竝んでゐた。

リオナルド・ダ・ヴェンチ

リオナルド・ダ・ヴェンチが星から降りて来て坐つた。

火をわすれた小猫が爐ばたで上手にその滑車を調整してゐる。

## 後書

東京を發つ前の勿々のなかで、この選集の編纂を濟ませた。大體それ／＼の原詩集から選んだが、手許にあつた書物は殆ど全部罹災しつくしたため、二三どうしても入手の方法のつかぬものがあり、やむなく『現代詩人全集』の「百田宗治集」並にさきに出した選詩集『蓬萊』に採録したものゝなかゝら選んだものもある。一切人手を煩はさないで遺つたため、選集を手寫をすゝめながら多少の改竄を施して行つた作品も少くない。今後はもうかういふものを出す機會もちよつとなからうから、まづこの選集でとつた形がそれ／＼の作品の決定的な姿だと思つてもらつてよい。

いま私は札幌にゐる。十一月の三日に東京を出發し、途中に三日を費して十一月六日この土地の人間になつた。今年の夏戦災者集團移民輸送の特別列車本部室に便乗して渡道する途中終戦の御大詔を拜し、それを機として私の三十年に近い東京生活にも一應の終止符を打た

せることにした。昨夜は相當にしばれて寒かつたが、けふはまたこの空はからりと霽れて、スキーに興じて遊ぶ子供たちの元氣な聲が嬉々として前の街路から上つて来る。疾走する進駐軍のジープの音に交つて、やさしい小鈴の音を立てながら行きすぎるスキーの軌みも耳にはいる。

150

昭和二十年十二月十一日

札幌市南五條假居

百田宗治

昭和二十一年五月一日 印刷  
昭和二十一年五月五日 發行



自選閱	定價十圓
著者	百田宗治
發行者	東京都神田區駿河臺三ノ一 目黒四郎
印刷者	東京都西多摩郡瀧村根ケ布三八五 牧恒夫
印刷所	東京都西多摩郡瀧村根ケ布三八五 株式會社 大化堂
配給元	日本出版配給統制株式會社
發行所	東京都神田區駿河臺三ノ一 株式會社 目黒書店
	電話神田(25)一〇五八 一〇五九 三三三四 五二〇八 振替口座 東京 二八〇九番 會員番號 A一三四〇〇一

1008  
X  
173

91156

M025



株式會社  
目黒書店

終